
放課後

みゅこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後

【Zコード】

Z9033C

【作者名】

みゅーこと

【あらすじ】

私は、相川桃子は夕暮れの差し込む教室で一人机に向かっていた。
誰もいない教室は異空間のようだ。

プロローグ

元来自分は脇役タイプなのだ。

周りでおこなっているドラマをいつもほんやり見ては、（大変だなあ。
熱いなあ）

などと他人事のように（実際他人なのだが）おもっていたものだ。
そうなのだ。

それなのに・・・まさかこんなことに巻き込まれるハメになるな
んじ。

考えてもいなかつた。さうあの時までは

教室の窓が橙にそまる。

ゆつくりとペンをはしらせていた彼女は、視線の端に映る朱に思わずドキリとそちらの方を振り向く。

窓の外では、ちらほらと帰宅する生徒が見える。

空の橙に溶け込まれた景色は、いつも眺めているものとは違った現実のものではないように感じさせる。

ガラツ、

勢いよく開いた教室のドアから、スラリとした長身の男子生徒が入ってきた。

「なんだ、桃子まだやつてんの」

「・・・・・。」

現実にもどされてしまった。

窓の外を眺めていた彼女は、恨めしそうに男子生徒を見やつた。

男子生徒、こと 小沢和樹はサッカーのユニフォームの襟をパタパタと仰いで

「大変だな」

と、その言葉とは反対ににやにやと笑っている。

「ほつといてよ。」

咳き、先ほどと同じように机に向かう。

なんのことはない、遅刻の為の反省文を書いているのだ。

「でも、園田の奴もよく数えてるよな。入学してから10月の半ばまでで50回目の遅刻だなんて。」

「そんなわけないでしょ。」

と言つものの、ありえるかもしないと思い直す。

園田、というのはこの高校の教師で担任だ。

50代半ばを過ぎてているだろうか、と思わせる外見はその実35歳。性格もネチネチと神経質で、根に持つタイプだ。

まあ、これは彼女の主観だが。

それというのも入学式の日、園田のことを（用務員のおじさん）と思いつみ「おじさん、トイレの電気が切れそうですよ。」と言つた後から何かと彼女に厳しくなった気がする。

まあ、数えきれないくらい遅刻をする桃子も桃子なのだが。

「部活サボり?」

机に向つたまま話題を切り換えるために、彼女 あいかわじゅう相川桃子が口を開く。

「んにゃ。途中で抜けてきた

それをサボりというのでは?

ちらりと視線を小沢にむける。

小沢は教室を一瞥して自分の机からノートを取り出す。

「数学の課題。明日提出だろ? 途中で思い出してさ

「真奈なら今職員室に行つてゐる。」

彼の頬がやや紅く染まつてみえたのは、窓から漏れる橙のせいばかりではないだらう。

「・・・別に」

図星を指されて言葉につまつてゐるのか、あらぬ方向を見つてゐる。

「ま、どうでもいいけど。」

彼女はまた机に向かう。

「・・・ちょっとは協力するとか思わないわけ？ 幼馴染のよしみで
れ。」

「思わないわね。」

小沢は均整のとれた顔を歪め口を真一文字に結ぶ。

彼女は一つ溜め息をつきペンを置く。

「幼馴染からの忠告ね、モタモタしてるとあつ、といつ間に他の奴
にもつてかかるよ。」

そうだ。先週だつてバスケ部でなかなかルックスのいい先輩に真奈
美は呼び出されていたのだ。

どうやら、親友はお断りしたようだが。
「分かつてゐるよ。だから桃子がさりげなく俺の事をアピールしてく
れりや」

「なんでワザワザ私がそんな事しなきやなんないのよ
「だからそれは幼馴染のよしみで」

言い合ひをしていると、

「おまたせ。」

当の松吉真奈美が教室のドアから姿を現す。

「あれつ？ 小沢くん？」

小首を傾げて、ふわりとした長い髪が揺れる。
長いまつ毛をパチパチと瞬かせる。

「あ、いやその、忘れ物して。」

慌てた様子でノートをひらひらとかざす。

「あ。数学の課題？」

「ああ。」

「結構難しかったよ。」

「そう？」

小沢が前髪をかきあげている。

（なにかつこいつかへんだか）

幼馴染の様子を見てもうひとつの溜め息を落とした。

「桃子ちゃん終わった？反省文」

真奈美は桃子の机の前の席につき、椅子を反対に向かへつつ腰を下ろす。

「あとちょっと。」

「こんなの待つてたら明日になっちゃまつよ」

横から小沢が口をはさむ。

「つるさいなあ。あんたもさぼってないでさつたら部活戻れば？それともまだここに屈たい訳でもあるのかしらねー？」ちらりと真奈美に視線をやる。

「な、何いつてんだよ」

みるみる彼の顔が赤くなる

それを隠すように、ぐるりと一人に背をむけると「じゃあな」と逃げるよに教室を出て行った。

「仲いいね。ふたりとも

「まあ、小学校からの腐れ縁つてやつだからね。仲はよくはないけど」

「幼馴染かあー。いいなあ」

真奈美はうつとつとしている。

桃子はペンを動かしながらちらりと親友を見た。

「今までなんとも思つてなかつたのに、ちょっとしたきつかけで意識しだすのよね。そして、二人ともギクシャクしだして・・・」

真奈美は妄想の世界に入したようだ。

（ホントに夢見る乙女なんだから。ま、あいつも不便なことね、全くもつて意識されてないなんて。とにかく私は現実問題を終わらせないと）

親友に構わずまたペンを走らせるのであつた。

プリントを持ち上げ「うーん」と大きく伸びをする。

「やつと終わつた。ごめんね、遅くなつて。」

「そう思うなら今後遅刻しないよう。」

真奈美の指先が軽く桃子のオデコを突く。

「てつ。あ、あいつノート忘れてる。」

「ほんとだ。」

くすくすと笑つて、「明日までなのにな。」と真奈美がそのノートを見つめる。

（わざととか？いや、舞い上がり忘れたんだな。）

事実はもちろん後者である。

「私職員室に反省文持つてくから、真奈は和樹にそのノート届けてやれば？」

「え？あ。そうだね。困るもんね。じゃあ、終わつたら校門の前で・

「園田の小言長くなると思うから、あんまり遅い時は先帰つてて。今まで待たせたのに悪いけど。」

「いいよ。じゃあその時はメールするね。」

・

一人は教室を後にした。

窓から差し込む夕焼けは少し薄暗くなつてきていた。

「しつれいしましたー。」

「明日は遅刻するなよ。」

背後から野太い声が追いかけてくる。

桃子は聞こえない振りをし、ガラガラと職員質のドアを閉め大きなため息をついた。

30分もみつちりと担任のお説教をくらつたのだ。

「疲れた・・・」

立っていただけだが、校庭を何周も走ったような疲労感が残る。
(もう真奈は帰ったよね。本当に園田の小言は長いんだから。 携帯
携帯・・)

ぶつぶつと言いながら鞄をじこじこ漁つて廊下を歩いていると、
どんづ 不意に何かにぶつかり鞄の中身をぶちまけた。

ガシャン！ バサバサッ

「いたづ。」

「わつ！？」

軽く尻もちをついて廊下に散らばった鉛筆やノートを眺めて(・・・

今日はなんてついてないの)と自分を呪つた。

「大丈夫ですか？どこかぶつけました？」

慌てた様子でひょろりと脊の高い青年が桃子の顔を覗き込む。

「あ、はい」

（誰だつて？確かに生物の先生だつたよつた。）

もう一年の半ばというのに、先生の名前を覚えてないといつのもほんやりしている桃子らしいのだが、実際この先生は若い男の先生という割にはあまり女性徒の話題にものぼつてこなかつた。

いや、変人という点で話題にでていたか。

「すみません。僕がぼーっとしてたから。」

廊下に散らばつた物を拾い上げながら申し訳なさそうに桃子を見る。

「はあ。」

桃子はのろのろと立ち上がりパンパンと制服のスカートをはたく。
(私の方こそほんやりしたんだけど・・・)

落ちた消しゴムに手を伸ばしていると、ふとその腕に何かが触つた。

「つづ・・・・・」

桃子はその黒いものを確認すると意識を放棄する事になつた。
薄れしていく意識の中「あーもい」せん」と慌てた声が響いていた。

プロローグ（後書き）

つたない文章ですがすみません。ゆっくりと進めていただきたいと思います。

消毒液の匂いがする。

いや、これはちょっと違う匂いだ。少し鼻を突くような。桃子は匂いの元を確認する為にゆっくりと瞼をあげた。

視線の先には、なんだか薄氣味の悪いカエルやアヒモリやらのホルマリン漬けがずらりと棚にならんでいる。

「わっ！」桃子は急に起き上ったものだから、今まで横になつていただらう長椅子から ドスン と落ちた。

「アイタタタ」

したたか腰を打ちつけてしまった。

（なに？）ホラーハウス？ ていうか、なんで私こんなところに？

「どうしたんですか？」

隣の部屋、 - - 科学室だらうか - - からひょろりとした先ほどの先生が顔を出した。

「あ。大丈夫、です」

腰をさすりながら長椅子に座りなおす。

桃子は周りを見回してその氣味悪いホルマリン漬けをちらりと確認した。

（一体どれくらいあるの。このホルマリン漬けは・・・）

桃子の考へてる事を察したのか、その先生は誇らしげに「すごいでしょ？これ。小さいのも含めてもうすぐ100体になるんですよ」

「確かにすごいですね、それより私なんでここに」

「さつき倒れたんですね。保健室がもう閉まつてたのでここに。大

丈夫ですか？本当に」「

「…そうだ。気絶したんだった。確か…思ひ出して桃子は自分の右腕を見て「ぎやああああああああ」と今更ながらに叫んだ。

もつすでにその生き物は自分の右腕にいなかつたのだが。水道の蛇口を見つけると、田に見えない速さで移動し手を洗つた。ぶるぶると震えがきた。

「せつ先生…。せつぎーさん…が

「ああー…ぎーさんですね」

「え？」

「すみません。ぎーさんが脱走してあなたの所にいらっしゃったんですね」

困つたよつた笑顔をみせると、彼のズボンのポケットからあの黒い奴がかさかさとでてきた。

「きやあっ。ちょっとまつて」

桃子は10メートルくらい後ろに下がつた。（実際は2～3メートルだが本人はそれくらいの心境なのだ）

「あの…。先生それは」

「これですか？「ごきぶりに似てるでしょ？」

先生は穏やかな笑顔をみせてソレをつまみあげた。

「ちょっと…近づけないでください」

「…すみません。」

しゅんと肩を落としてソレを手のひらに包み込んだ。（子供みたいな先生だな。ていつか、その手…）

桃子はあることに気が付き愕然とした。

「まさか。先生その手で私を運んだんですか？」

「そんな、全然重くなかったですよ。気にしないで下さい」引きつり慌てた様子で両手を左右に動かす。

「・・・重かつたんですね。つていうじゃなくって。ところどころ、

「ぶつぶつと独り言のよひに詠き、（その変な虫をべたべた触った手で運んだんですね・・・）

桃子は潔癖症という訳ではなかつたのだが、極度の虫嫌いなのだ。特に小さくて足がたくさん付いてるのが苦手であった。

（帰つたら速効制服クリーニング出そつ）

本当なら今すぐ脱いでしまいたいがそういうわけにもいかない。

なんだか どつ と疲れがでてきた。

「じゃあ、あたしそろそろ帰ります。」

「そうですね。もう暗くなつてますし。」

窓の外を見たらずいぶん暗くなつていた。

時計の針は7時を少し過ぎた所だ。

「もうこんな時間たつてたんですか！」

学校に残つている生徒は殆どいなあわい。

校舎の中も外も静まり返つてゐる。

いつもとは違う学校の様子に不思議な優越感がわいた。

（夜の学校なんてめつたに遭遇できぬいよな。なんか得した気分）

もつとこの気分を楽しみたいが、そもそもいつてられない。

「じゃあ、私そろそろ帰ります。先生」迷惑をかけました

「ちょっと待つて下さい、送りますよ

「一人で帰れます」

「だめです。夜道は危ないんですから。」

真剣な顔で言われたたものだから、「はい」と思わず返事してしまつた。

（そういえば、この先生なんて名前だったっけ？）

などとほんやりと考えながら、再度をしているその先生の後ろ姿を

眺めて

「あの、手は洗つて下さいね」と声をかけたのであった。

(送るつて、車じやなかつたんだ)

桃子は一人並んで歩きながら落胆を隠さず先生の方をちらりと見た。
- - - 見る、といつても桃子の目線は先生の胸あたりにあるので
見上げる格好になつた。

学校から駅まで1キロ程ある。

電車で2駅乗つて駅から近くのマンションが桃子の家だ。
歩きだと1時間はかかるのだ。

そんな桃子に気がついたのか、「すみません。歩くの早いですか?」
勘違いをして見当外れの事をいつている。

「いえ、そんなことないです。ただ」

「ただ?」

「送つてもらつといて言いにくんですけど、てっきり車だと思つてたので」

言いにくいくらいに、ズケズケと言つた。

先生の顔が赤くなる。

「そうですよね、思いますよね。ちょっと今修理に出していく。すみません」

(何も謝るこないのに。 - - - - - -)

「修理つて、事故つたんですか?」

「いや、当て逃げとつやつで」

「警察には?」

「気がついた時には遙か遠くに逃げられてましたから。ナンバーも
わかりません」

情けなさそうに肩を落とす。

「ついてないです。」

「まあ、いつもの事ですから」

困ったような笑顔を見せ頭をかいだ。

(こつもついてないんだ)
妙に納得し氣の毒に思う。

「相川さんは、そういうえばこんな遅くまで何してたんですか？」

先生が自分の名字を知っていたことに驚いた。

そんなに桃子は田立つほうでもなく、先生の授業でも当てられたこともない。。

もしかして、全校生徒の名前を覚えているのか。

「あの、反省文を」

「なんの反省文ですか？あ、遅刻でしょ。」

「なんで知ってるんですか？」

「園田先生がチェックしてるのをみかけて・・・」

言つてから、しまつたという風に口に手を当てている。

「・・・ほんとにそんなことやつてるなんて」

桃子は呆れてしまつた。もっと他にやることはないのだろうか。

「ほん、とひとつ咳払いをし「まあ、遅刻はよろしくないです」

「- - - - はい。」

「低血圧なんですか？」

「ただの寝坊です。」

「そうですか？でもそれにしては回数が多くりますし。なんか訳で

もあるんじゃないですか？」

今までにそこまで聞かれたことがなかつたので、ちょっと驚いた。いつもなら「寝坊」といえば、誰もが納得していたのだ。

實際、授業中も度々居眠りをして先生達を困らせていたのだから。

桃子は黙り込んで歩いている。

「そういえば、先生。私が休んでる間なにしてたんですか？」

唐突に彼女が話題を変えた。

「え？ああ。ヤモリの生体の觀察をしてたんです。最近生物室の窓

にヤモリを見つけたので捕獲しようと画策中なんですが、なかなかすばしつこくて手を焼いているんです。」

大の大人がヤモリを熱心に追いかけてる姿を想像して吹き出してしまった。

「いつ……忙しそうですね。」

当の本人はキヨトンとしていた。

いつも間にか駅に着いてしまった。

会社帰りのサラリーマンや、学生、O-ル風の女のの人など大勢の人に行きかつている。

「それじゃあ、先生。私ここで……」

先生の肩越しから、人混みのなか見慣れた人物をみつけ、思わず彼の手を掴んだ。

そのまま、コンクリートの柱の影にひっぱり隠れる。

「わわっ。どうし……」

「しつ。」

桃子は視線だけその人物に向け、じつと身を潜めた。

その人物……先生と同じくらいの長身で黒いスーツを着こなし明るい髪色をした。恐らく一枚目といわれる部類の顔立ちだろうホスト風の青年を見ていた。

横には、派手で美人なキャラ嬢らしき女性が怒つてているのだろう。わなわなと肩を震わせていた……かと思うと ばしつ！ とその青年の右頬を平手打ちした。

「さいていつ！」

まだ殴り足りなさそうだったが、周りのギャラリーが注目しているのに気が付き そのまま踵を返して走り去った。

一瞬その場にいた人達が足を止め注目し沈黙がおりたが、またいつものような人の波に戻った。

ちらちら、とそのホスト風の青年を見てはひそひそ話して通り過ぎる者もいる。

彼は別段気にする素振りもみせず、赤くなつた頬をさすつていて。そしてそのまま煙草を取り出し、火をつけると雑踏の中に姿を消した。

「…………お父さん」

桃子は無表情で呟いた。

先生の方を振り返ると、田を丸くしている。

驚愕しているといったほつがあてはまるだらう。

「すみません。みつともない所みせて。」

「…………いや、相川さんのお父さん？」

「はい。見てのとおりホストします。」

「まさか！」

先生はわずかに動搖したようだ。

「いや、そういう意味じゃなくつて」

先生が慌てていると、

「桃子ちゃん？」

背後からかわいらしい声が聞こえた。

振り返ると、真奈と小沢が驚いた顔で立つていた。

「なにやつてんの？桃子それに、武田先生も。」

と言つた小沢の言葉で（あ、武田先生つていう名前だった）と今更ながら思い出していた。

「いえ、相川さんがちょっと倒れたので気がつくまで待つてたら暗くなりまして……」

「…………」

と、たゞたゞじへー一人に経緯を話し出した。

「もう！携帯メール入れてるのに返事しないし。心配してたんだよ」
真奈が大きな瞳を更に大きくし、口を尖らせている。
(そうだ、私も携帯で連絡しようとしたんだっけ。)

「心配かけんなよなー」

小沢の方は桃子がいなくて樂しい時間が過じせたのだらう、ちょつと「」機嫌だった。
「じめんね。」

「じゃあ、僕はここで。」

桃子は少しだけ、まだ一緒にいたいよつな寂しさを覚えた。が、気を取り直すと

「武田先生送つてくれてありがとうございました。」

彼の方を向きお辞儀をした。

「いえ。明日は遅刻しないよな。」

困ったような笑顔をむけ「君たちももう遅いから、氣をつけて帰るんですよ。」

「ついーす。」「はい。」

武田先生はまた来た道を戻つて行つた。

桃子はその背中を、雑踏にまぎれ見えなくなるまで見つめていた。

昼休み

「納得いかないなあ」

次の日の昼休み。

屋上のコンクリートに座り、真奈美と桃子はお弁当を広げてこる。もう10円だというのに、昼間は結構暖かい。ちらほらと、他でもお喋りをしたりお弁当を食べたりしている。ぽかぽかと太陽の光を浴びて、お腹がいっぱいになり眠くなるようだ。

うとうと、としかけた所で「聞いてる?」と、横から真奈美が覗き込む。

「うん、聞いてる。聞いてる。」

ふわあ、と大欠伸をしてアルミのシンプルな弁当箱を広げる。「だって、昨日の桃子ちゃんなんか変だつたんだもん。私が何言つても上の空だし。武田先生と何があつたんじやないかって思つて。「まあ、ひどい日にはあつたね。」

桃子は「きの」さんを思い出してはぶるぶる、と身震いをした。

「それより、真奈はなんで和樹と一緒にいたの? あんな時間まで。」真奈美はぴたり、と動きが止まり「だって、ノート渡したら小沢君が一緒に帰るうつて。駅で桃子ちゃんを待ってる間もせつかくだからって、あんみつ食べることになつて・・・」

と、もじもじと喋る。

桃子が気絶している間に、心配もしていただろうが楽しんでもいたので後ろめたいようだ。

「で? 和樹の奴はなんか言つてた?」

「え? 別に桃子ちゃんの事なんて聞いてないよ。」

慌てた様子で言い訳する真奈美を見て

(あいつめ・・・今度会つたらとつあめてやるわ)
と、心に誓つのであつた。

-----その頃の小沢といえば、「ハックしょん！」

「和々風邪かよ。移すなよ！」

「ばつか！風邪なんてひくかよ。誰かが俺の噂をしてるんじやね？」

「ああ、お前の幼馴染がお前の悪口でもいつてんじやん？」

言い得ている。

小沢は親しい男友達数人と花壇の横でサッカーボールを転がしていった。

「そういうえば、その子の友達の松吉さんってかわいいよなー。」

ぴたり、と小沢の動きが止まる。

「睨むな睨むな。横からちよつかいはださねーよ。」ぽーんとボールが宙に浮かぶ。

「でも、マジでかわいいよ。」他の友人が口を挟む。

「そうだな。1年の中じやあダントツだよな。」

「そうか？俺的には幼馴染のこもいいと思うね。」

それを聞いて小沢はあからさまに表情を歪める。

「ええつ！あいつが？？」

「そうだなー、愛想ないけど。なにげに美人さんだよな。」

「うん。ちょっとあのなんの感情も出さないような日がミステリアスだよな。」

ワイワイと言い合いながら「いいよなー、和は」

と、ボールが小沢の所に飛んでくる。

「はあ？全然よくねーよ。あんな鬼のような女」

そうだ、小学生の頃から小沢は桃子には頭が上がらない。今までこそポンポン言い合えるまでになつたのだが。

小学5年生の頃、何となく男女が意識しだして男子グループ、女子グループと別れてしまった。

その時のリーダーとなっていたのが、男子が小沢で女子が桃子であった。

ちょっととしたきつかけで喧嘩が大きくなり、リーダー同士のタイム勝負となつたのだが喧嘩でも、ゲームでも、かけっこでも和樹の惨敗だったのだ。

でも桃子は「自分は女だから負けた」と言い、「男子とか女子とかいつて、結局2種類の人種しかいないし。喧嘩してるのはばかばかしいしもつたいないと思うよ?なんだかんだ言って、みんな異性が気になるでしょ。」

と、至極まともな事を皆の前で言つたのだ。

まあ、決着が着いたつてことで女子はいよいよに男子を使うようになつた。 - - 女子は弱いから男子にいつも面倒な事を頼む。 男子も女子に頼られて悪い気はしない。

(そして俺は女に負けたつていう屈辱感と、それを桃子だけが知つているという後ろめたさであいつには頭が上がらなかつたんだよな。)

本当に恐ろしい奴だ、結局は桃子(女子)のいじょうになつたのであるから。

「おい、和。何ボケ~としてるんだよ。」

「え?」

「え?じゃね~よ。幼馴染紹介しろよつつてんの。」

「ああ?あいつは止めといた方がいいぜ。」

「いいじゃん、別に。俺はああいうタイプがいいんだよ。」

「そうだ、そうだ。松吉さん紹介しろつてんじやないんだし。」

真奈美の名が出て、ぴくんと眉が動く。

「わかった。一応言つとくけど、俺はしらんぞ。」

「おう。頼んだ！」

友人は上機嫌になり、自分の前に来たボールを小沢にパスした。小沢はそのボールを取り損ね、バランスを崩して尻もちをついたのであった。

ファースト・・・

学校のチャイムが鳴る。

チャイムには2種類あって、始まりのベルと終わりのベルがある。もちろん自分は終わりのチャイムが好きなのだが、特に1日の終わりを告げるあの音が好きだ。

今の季節は陽が短くなり、恐ろしく紅い夕焼けが校舎を照らす。

「こんなとこに居たんだ。」

セーラー服を着た髪の長い少女が教室のドアに姿を現す。

「また一人でトリップしてる。」

くすくすと笑いながら自分の前にゆっくり近寄つて、机を挟んで正面に立つ。

「そんなんじや・・・」

むつ、とした表情をして言い訳をしようとしたが図星だったので、そのまま横を向く。

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

沈黙が落ちた。

いつもなら少女からころころまくしたてるのだが、不思議に思い、ちらりと少女の方に視線をやる。

少女は窓の外をぼんやりと眺めて、「血の色みたいだね。」と呟く。

その声が妙に大人びていたので、ドキリと心臓がなる。窓の外を眺めていた視線が自分の方を見据える。

ドツ ドツ ドツ ドツ ドツ ドツ ドツ

心拍数が上がり、体が熱くなつたのを感じる。

夕焼けの朱に映る彼女の顔は恐ろしくきれいだつた。

瞳を逸らせずにそのまま硬直していると、「きれいだね。」と少女はとびきりの微笑を浮かべ、ゆっくりと顔を近づけ彼女の唇を自分のそれに重ねた……。

驚いたことに、その瞬間自分の心臓は落ち着きを取り戻したのだった。

「だからセー。」

ホームルームが終わつたとつはいえ、教室にはまばらに生徒達が談笑している。

小沢は桃子の席の前の机に寄りかかり先ほどの件を話していた。

「余計なお世話。紹介してやるなんて。まるで私が男に飢えてるみたいじゃない。」

桃子は小沢をジロリ、と睨む。

「そういうんじゃなくつてさ。おまえも男と付き合つたらちょっとは女らしくなるんじゃないかって。」

「そんなことあんたに心配してもらわなくつて結構ーそれより自分の事をなんとかしたら？」

切り返され、「うつ。」と言葉につまる。

隣には当の真奈美がいるのだ。

類を赤くして、「だから無理だつて言つたんだよ。」とぶつぶつ
独り言を言いながら教室を出て行つた。

「まつたく、何考えてんだか。」

「そうだよねー、桃子ちゃんにはちゃんとした想い人がいるんだも
んね。」

真奈美が意味深な笑顔を浮かべてゐる。

親友がこんなにもこの手の話題が好きだなんて思わなかつた。
今まで恋ばなのよつたな類の話は桃子には無縁だつたから知る由もな
かつたのだが。

「だから、なんで私があの先生の事を好きだなんて思う訳?」

桃子は「うんざり」といつた風に首を廻す。

「だつて桃子ちゃん、昨日の帰り際先生の事を切なそうに見つめて
たじやない。私、桃子ちゃんが男の人あんな瞳でみつめるのなんて
見たことない。」

真奈美は真剣な顔をして熱弁してゐる。

「どんな瞳よそれつて。」

桃子は自分が少女漫画のヒロインのよつた目をしてゐる所を想像し
て背筋が寒くなつた。

「あ、タイムリー。武田先生だ。」

「まさか。」

と言いつつ、真奈美が指さした方（窓の外の校庭の花壇）を見た。
そこには、花壇に這いつくばり何かを凝視してゐる風の武田先生が
いる。

（また、何やつてんだろ）思わず噴き出してしまう。
じりじりと花壇の中に入つてゐる所に、桃子の担任の園田が慌てた
様子でやつてきた。

少し花壇を踏んでしまつたのだろう。ガミガミと何か言われて、武

田先生はしゅん、となつている。

桃子が笑顔でそれを眺めていると、「そんな瞳」と言って、真奈美は桃子を見ている。

友人にひとり笑いを見られて、珍しく頬を赤くする。

「これは別に恋をしてるからじゃなくて、あの先生が面白いから。

「ふーん。」

真奈美は納得しない様子で横目で桃子を眺めた。

それを気にする風もなく、桃子はまた窓の外に視線を移した。

外では長身の背中を小さくして、まだ園田からのお説教を受けている武田先生がいた。
窓からはもう秋だというのに、まだ温かい風が教室にながれこんできた。

「ただいま・・・・・。」

声をかけるも、マンショングリーダを開けるも返事がない事は分かつている。

桃子は鞄をダイニングの椅子に置き、冷蔵庫からパックのいちご牛乳を取り出すと「ぐぐぐ」とそのままラップ飲みした。

行儀が悪いと自分でも思うのだが、別に誰もそれを咎める者もいないので（そしていちご牛乳は桃子しか飲まないので）それを止めることはなかつた。

「おかえり」

声がして牛乳を「ほしやつになつた。

誰も居ないと思つていたのに、振り返るとダイニングの入り口に髪の色の明るい上下ジャージの背の高い男が立つていて。

「居たんだ。びっくりした。」

桃子が「ほしやつむせていやい」牛乳をテーブルに置いた。

「ああ。今日は早いな。」

その男 - - - - 相川孝平は冷蔵庫を開けミニネラルウォーターを取り出す。

「まあね。」

孝平が横切つた時に香水の香りがしたが、それには気付かない素振りで答えた。

（こつも私が帰つてくる時はいないくせに）と、桃子は内心悪態をついた。

喋るのが面倒なのでそのまま自分の部屋に向かおうとして、思いなおし足を止める。

「そういえば、昨日駅で見かけた。」

孝平はちょっと驚いた顔をして桃子を見る。

（何日ぶりに田が合つたかな。）

などと思いながら自分の父親を眺めた。

「・・・・・ そうか。」

孝平はそれ以上言い訳するでもなく、慌てる素振りも見せなかつたので桃子は軽く溜息をついた。

「それだけ。」

と言い、今度は本当に自分の部屋に足を向けた。

「 - - - - パタン - - - - - と部屋のドアを閉めた。

その音は桃子と孝平との間にある心のドアのよつと應えた。

いつもそうなのだ。
何事が起こつても、父はあるで自分の事ではなによつて興味を示さない。

それは桃子に対してだけではなく、誰に対してもである。

そしてそれは、桃子が幼少の頃から変わつていない。

それが孝平の性格からくるものなのかどうかは桃子には分らなかつた。

といふが、自分に興味のない父親に対して桃子も（ただ面倒をみてくれる人）くらいにしか思つていなかつたのである。

ベッドの上に制服のまま「ひひん、と横になる。
とたんに睡魔が襲つてくる。

「今日は眠い・・・・。」

ふわあ、と大欠伸をして壁にかけている時計に田をやる。

時計の針は午後5時を指そうとしていた。
ゆっくりと瞼が下がる。

うと、うと。と、意識がぼんやりしていく。

瞼の裏に浮かんだのは、武田先生が困った顔で「この香水は・・・」と園田先生に説明している様子だった。

「51回目だぞ。」と言い园田先生が薄くなっている頭をかきながら怒っている。

その光景が霧がかってきて体が深い底に落ちていく感覚を覚えた。そして、そのまま桃子は深い眠りに落ちたのであった。

ハクシュン。

派手なくしゃみをして、ハンカチを口に当てる。

もう片方の手は電車の手すりを掴んでいる。

昼間はまだ暖かいが、朝方はさすがにもう肌寒くなってきてこぐすぐす、と鼻をならした。

今日はいつもより2本も早い電車に乗ったので比較的乗客が少ない。それでも座席に座れるという程ではないので、桃子は入口のドア付近の手摺りに立っていた。

昨日あのまま眠ってしまったので、今朝は朝早く目が覚めてしまった。

そのままシャワーを浴びて、する事もないので早めにでたのである。目覚めた時には父親の姿はなかった。まだ仕事から帰ってきてない

ようだつた。

電車が次の駅に停車し、乗客が乗り込んでくる。

窓の外をぼんやりと見ていたが、ホームから慌てて走つてくる人影を見つけて「あ。」と思わず声が出る。

入口のドアが閉まろうと音をたてた。

彼が電車に駆け込んだのと閉まるのが一緒だつた。

ぜいぜいと息をきらしている。

「おはよっ、じざいします。武田先生。」

桃子から彼に挨拶した。

それで桃子に気付いたようだつた。

「あ。相川さん。おはよっ、じざいします。」

胸に手を当てて呼吸を整える。

右の頭部の髪が ぴょん と跳ねている。

桃子はそれを見つけて田を細める。

「一緒の電車だつたんですね。」

「そうですね。」

桃子の隣の手摺りに掴まり汗を拭つている。

「いつもこの電車なんですか？」

「はい。もう1本遅いのはものすごく混んでるんですよ。」

汗を拭きながら困つたような笑顔で答えた。

（だからそんなに慌てて乗つたんだ。）

「・・・・そういうえば昨日校庭の花壇で何してたんですか？」

問われて武田先生は顔を赤くしている。

「見てたんですか？」

聞いて悪かったかな？と、言つしまつて桃子はちょっと思つた。

「きじさんのが脱走してしまつて、ちよつと探してたんです。」

「・・・・・見つかりました？」

園田先生に絞られていた事にはあえて触れなかつた。

「はい。園田先生が見つけてきてください。」

「そうなんですか。」

（だからあの時怒っていたのね。）

普段なら花壇を踏んだくらいでみんなにしつこく説教するような先生ではないのだ。

おそらく自分の持ち物か何かにきじさんが入り込んでいたのだろう。

「ほら、元気に・・」

武田先生はポケットから何か取り出そうとしたので、桃子はその手を慌てて掴んだ。

ちょうどタイミングよく電車が大きく揺れたので、桃子はバランスを崩し武田先生の胸に顔を埋めるような格好になってしまった。

-----男の人の匂いがする。

満員電車に乗りなれているので、男性に接触することなんて何度もあるのだが。

香水の香りでも男臭い煙草の匂いでもない、先生の匂い。

スーツの上からじつじつした先生の胸の感触を確かめて。

桃子は体の奥が熱くなるのを感じた。

「わっ！すみません。」

武田先生が驚いた様子で桃子から飛び退いた。顔が赤くなつたりあおくなつたりしている。

「私はバイ菌ですか。」

勢いつけて離れられたので、桃子は傷ついたという風に言つてやつた。

それを見て、彼は引きつた顔をして否定している。

桃子はふん、と窓の外に視線をやつた。

本当は、熱くなつた顔や早まる鼓動を悟られなにようにそんな態度

をとつたのだ。

もちろん先生はそんな彼女の心情など気づく様子もなく、ただ困ったような顔をしていたのであった。

窓の外はいつの間にかどんよりとした曇り空で、今にも雨が降りそうだ。

「降りそうですね。」

桃子は何事もなかつたよつとぽつりと呟く。

「そうですね。今日は予報でも雨マークついてましたからね。」

ほつとしたよつこ、武田先生が答える。

電車は桃子たちの降りる駅に到着した。

学生や会社員がわらわらと電車を降りる。

「あれ？ 桃子もこの電車だつたんだ。」

背後から声を掛けられ振り返る。

小沢和樹が驚いた表情で歩いてきた。

別の車両に乗り合わせていたのだろう。

「あ。先生もおはよつとやいまーっす。」

隣の武田先生に気が付くと、さらに驚いた表情で挨拶をする。

「おはよつとやいます。」先生が答える。

「珍しく早い桃子」

「珍しくは余計よ。それより、いつもこんなに早いの？」

「ああ。サッカー部の朝練だよ。それより、2人こんなに朝早く・・

・・・まさか。」

小沢が桃子と武田先生を交互に眺める。

桃子はピン、とし小沢の脚を思いつきり踏んだ。

「いてつ。なにすんだよ。」

「なに馬鹿なこと勘ぐつてんのよ。」

桃子は氷のような視線を小沢に向けた。

「先生見ました？ この暴力」

幸い見られていなかつたようで キヨトン としている。

駅の外ではもう雨が降り出していた。

3人は足をとめた。

「桃子、傘持つてる?」

「持つてる訳ない。」

武田先生は鞄から折り畳み傘を取り出し小沢に渡した。

「君たちはこれに入つて行きなさい。」

「え? でも先生は?」

「僕はそこコンビニで雨宿りしてから出ますので。」

「先生の傘なのに。」

桃子は恨めしそうに小沢を見た。

俺が悪いのかよ、という風に小沢は頬を膨らました。

「気にしないで下さい。ちょっと買いたいものもあつたので。」

先生は軽く笑顔をみせてコンビニの方へパシャパシャと走つて行つた。

「ありがとうござります。」

2人はお礼を言つて、「じゃ行こうか。」

と、不本意ながら小沢と相々傘をして学校へ向かつたのである。

ぱつ ぱつ、

窓の外を見ると雨が降り出しつづいた。

朝からどんよりと曇り空だった。教室の中は少し薄暗いのだけれど電気が点いている。

ぼんやりと窓の外の雨音に耳を傾けていた、心中のものがもやもやした物が流されるようだ。

「なあ、寝てんの？」

いつの間にか田を閉じていたのだから、ふと顔をあげると切れ長の瞳を人懐っこくに細めた幼馴染の顔があった。

「いや……。」「

思わず田を逸らしてしまつ。

「あいつ、知らね？」

「ああ。」「

「相変わらずそつけないなー。」「

彼は田の前の席に腰をかけると長い脚をぶらつかせている。

教室はまだ授業が始まるには間があるからだつたが、やむむむ、とあちこちで話し声がしていた。

「……なんかあいつ変じやね？」

突然真剣な表情になり、じちじらを見据える。

「そう……かな。」「

私は無表情でその視線を受け止める。

「なんか言つてなかつた？怒つてるような感じじゃないんだけどさ。

・・・俺なんかしたかな。」「

ぶつぶつと言いながら悩んでいる様子の幼馴染を見て少々胸が痛んだ。

あの - - - 放課後での一件以来、自分も頭を悩ませていた。

彼女がどうこうつもりで自分にキスをしたのか、ただの気まぐれだつたのか。

あれ以来特に変わった態度も見られず、向こうも何事もなかつたよう接してくるので、あの時のあれは夢だつたんじやないかと忘れそうになる。

いや、忘れるように努めようとしているのだが、なかなか頭から離れずにもやもやとしていたのだ。

「俺、あいつにはつきつ言おうと思つ。」

彼は思いつめた表情をして机の一点を見ていた。

「・・・・・そう。」

咳いて、心臓がきゅつ、と掴まれたような感覚を覚える。

「泣かしたら殴るぞ。」

自分はうまく笑顔がつくれてるだろうか。

「まだ、付き合つて決まつたわけじゃねーよ。」

言いながら、彼の顔には余裕が見て取れた。

周りの生徒の殆どが彼女といつは付き合つてゐると思つてゐるようだ。

実際彼女は噂された時も否定するでもなく、笑顔で受け流していたものだ。

二人並んだ姿はまさしく美男美女。 幼馴染は少々やんちゃだが、人懐っこさと愛嬌のよさで男子生徒にも女子生徒にも人気がある。 彼女はしっかり者でクラス委員などにも選ばれる程皆の信頼を得ている。

「じゃあ、今日はそういうことによろしくな。」

いつも時間が合うときは3人で帰つているのだ。

「分かつた。」

答えて、彼が軽い足取りで教室を出していく後ろ姿をじっと、眺めていた。

雨の音が更に強まつたように聞こえてきた。

「雨強くなつてきたね。」

朝から降りだした雨は、午後の授業が終わつた時には周りの景色が見えなくなるほど強くなつっていた。

「うん。」

頷いて桃子はパンをかじつた。

いつも自分でお弁当をつめるのだが、昨日は帰つてそのまま眠つてしまつたので購買でメロンパンとクリーミパンを買つてきたのだ。真奈美は机に小ぶりのお弁当を広げて卵焼きを口に運んでいる。

「災難だつたね。」

ちらり、と桃子の様子を窺ひつつ元に言つ。

「まあ、私もうかつだつた。」

桃子は口をもぐもぐと動かし眉間に皺を寄せた。

その後、 - - - - - 小沢と相々傘で登校した桃子は、その場に居合わせた生徒の注目を浴びてしまつたのだ。

小沢は結構モテル男子であつたのだ。

学校に着いた後、さつそく3年の女子の先輩に呼び出しをくらつた。 - - - こんな少女マンガみたいなことが桃子の身に起つた事に驚き、少しだけ興味が湧いて足を運んだのだが。

和くんとはどういう関係か、とか 抜けがけするなどとか。

くだらない事を言われた気がする。（それよりも、濃い化粧と改造制服に気を取られていたので上の空だったのだ。）

桃子はめんどくさくなつて「あなたたちには関係ない。」的な事を言つて早々と退散した。

もしこれが真奈美だつたら、と思つとわつとした。

あんな「ギャル風女子が周りを固めてわいわい言おうものなら、真奈美は小さくなつて大層怖い思いをするだろう。

（やつぱり和樹には真奈美はもつたらない。）

桃子はいちご牛乳を「ぐーぐー」飲みながら真奈美を見た。

「でも、無茶しないでね。」

と心配そうに桃子を見つめている。

「うん。気をつける。」

桃子がクリームパンの袋に手を伸ばした時、「今朝はどうも。」と、当の小沢がひょっこりとやってきた。

今日は、その能天氣そうな顔を見ると無償に腹立たしくなる。

同じクラスなので、桃子が呼び出されたといつ事は本人の耳にも入つてゐるはずだ。

「…………まあ、その時には彼は丁度いなかつたのだが。」

「何？」

思わず剣のある声になつてしまつた。

「あの、いやあ。大丈夫かなと思つて。」

小沢はちょっとたじろいだ。

桃子はじとつと小沢を眺めていたが、一つ大きなため息をついた。

「……まあ、あんたも大変ね。」

（あんなお姉さま方から動物園のパンダみたいに扱われて。）

「ああ・・・・。まさかそんな事になるなんて。」

小沢は多少罪悪感を感じてるようだつた。

少し考へてゐる様子だつたが、ちらりと真奈美の方を見る。

「何見てんのよ。」

桃子はすかさず指摘する。

「あ？ いや別に」

小沢はあらぬ方向を見ながら額をかいている。

恐らく 真奈美に世話をしたかったのだが、心配したのである。

彼は私の机の横にぶら下がつて いる折りたたみ傘に気がつくと、「まだ返してなかつたんだ。」と、話題を変えた。

「うん。忙しかつたからね。」

桃子は横目でちらりと彼を見て、最後の一切れを口に放り込んだ。

「じゃ、私は先生にこれ返していくね。」と立ち上がる。
真奈美はあの意味深な笑顔を浮かべて、「いつてらっしゃい。」と言

1

小沢は邪魔者がないなくなるので、あからさまにばつと顔を輝かせて「気をつけてな。」等とよく分らないエールを送られた。

窓の外の雨は先程より柔らかくなつたようだつた・・・・・。

図（後書き）

スロー・ペースで、文章もつたないですがよひじへべりいひ。

カエルのウタ

生物室のドアを恐る恐る開ける。

中は薄暗く、人体模型が真横にあったので「ひつ。」と叫び声を出し、思わず後ずさりしてしまつ。

電気が点いていないのでここには居ないのだろうか。

桃子がまわれ右しようとしたその時、「なんですか?」と奥から声が聞こえてきて、もう一度声を上げるはめになつた。

「電気もつけないで何してんですか?」

桃子はスタスターと声のする方に近づく。

「 - - - 周りの棚に並ぶホルマリン漬けには皿を向けないよつ - - - - -

「はあ、まあ生体の観察というか。」

武田先生が準備室から顔を出して「ああ、相川さんでしたか。」と、ちょっと驚いた顔をした。

（誰とと思って返事したんだら・・・・。）

なんとなく、胃の方かもやもやした感じがする。

桃子が怒ったような戸惑ったような顔をして立つていると、足元に何かが通り過ぎた・ - - - - - 。

いや・ - - - 通り過ぎたといつより何かが跳ねている。

「あつ！」

先生が慌ててそれを捕まえようとしたが無駄だつた。

1匹2匹ではない。準備室の方から數十匹もいるだひつ。

カエルが飛び出して來たのだ。

桃子はそのまま固まつてしまつた。

別に怖くて動けないのではなく、へたに動くと踏みつけてしまつて

うで動けないのだ。

（お願いだからこっち来ないで。）

自分は透明人間だ、といわんばかりに息も殺している。

その願いも虚しく数匹が彼女の足に貼りついた。

冷たくヌルつ、とした感触を脚に感じて全身に鳥肌がたつた。

失神しそうになるのを（こんなカエルまみれの中に倒れたらえらい事になる…）と、かるうじてこらえ、右手に持っていた傘でカエルを追い払う。 - - - - というか振り回していた。

「うぐつー！」

運よく振り回した傘が、這いつくばってカエル奪取中の先生の股間に直撃した。

先生が後ろを向いて悶絶している。

桃子はカエルを追い払いながら「ごめんなさい。」と一言。

こちらはそれどころではないのだ。

傍から見たら、傘を振り回している女生徒。股間を押さえて蹲つている先生。数十匹の跳ねるカエルと、かなり滑稽な姿に映つたにちがいない。

（私に生物室は鬼門だわ。）

先生も落ち着き？をとりもどし、ようやくカエルを集めて一息ついたところで桃子は確信したのだった。

右手に握っている折りたたみの傘は、いろんな所にぶつけたのどう無残な姿になつていた。

「あの・・・これ返しにきたんですけど。」

さすがに渡しづらく、おずおずとそれを差し出す。

思い返してみれば、それで先生の急所をヒットさせてしまったのだ。

「あ、ああ。わざわざありがとうございます。」

武田先生はそんな事気にする風でも、気を悪くするでもなくその傘

を受け取った。

「すみません。お手洗いしちゃつて。」

「氣にしないでトセ。」の傘もこんなになるまで使つてもらひて

「本望でしゅ。」

便い道は雨傘とじてり、ながらかんてすにとれ
桃子に突っ込まれて先生は困つたように笑つた。

「武田勝が、」と、二女君の顔が、こころに現れた。

生物室のドアの前で呼んでいる。

桃子は開いたドアからきれいに化粧した女性が顔を出すのを見た。

その女性が昔の桃子の氣が付いて居たからである。

なんとなくその声が厳しく聞こえたのは桃子の氣のせいだらうか。

「蠻」

た。桃子は、男子生徒に人気のその女教師の名前を確かめるように呟いた。

武田先生に傘を借りてたので返しにきたんですね。

その理由を納得

「その理由に納得したようで、声色が柔らかいものに変わった。
「もうすぐ限目が始まるわよ。そろそろ教室に戻りなさい。」

今日は吉塚先生の授業です

「あ、あら、そう、たうたわね。先生は武田先生に用事があるから、用事があるわりには、一向に生物室の中に入る様子はみられない。きっとこの薄気味の悪い部屋に入る勇気がないのだろう。

武田先生がドアまで歩み寄ると「どうしたんですか？」と訪ねた。

いえ、その。

ちら、と桃子の方に視線をやり、あからさまに言いつらそうな顔をする。

それに気づいたのは桃子の方であった。

（私が邪魔な訳ね・・・・・。）

なんとなく腹だらしくも思つたが、気づかない振りをしてそのままそこに突つ立つてゐるのも嫌だつた。

桃子は無表情で「じゃあ、傘すみませんでした。」と武田先生に言うと、何事もないように生物室を後にした。

廊下を歩いていた桃子は窓の外の雨音に気付き、足を止めてそちらに視線をやつた。

窓には怒つたような顔をしている少女が映つてゐる。

（何の用だつたんだろ、吉塚先生。）

吉塚先生が来たとき、武田先生は驚いた表情をしていなかつた。時々生物室に来るのだろうか。

仕事の話だろうか。

二人はつきあつてゐるのだろうか、そんな噂など聞いたこともないが。

桃子は窓の外に視線をやりながら、二人の事ばかり考えていた。そして、自分がなぜこんなにも一人の事が気になるのかと不思議に思つた。

本来桃子は他人に左程興味が湧かない。

誰と誰が付き合つてゐるだのという噂話も右から左へ抜けて殆ど覚えてゐないのだ。

そんな彼女が今はその他人の事で頭がいっぱいなのである。

「変なの。」

呴き、もうその事は考へないといつぱいに頭を軽く振つた。

----- 窓の外の雨がアンバランスな音色を奏でていた。

自分はいつもここにいるようでもここに居ないような、そんな不安定な感覚を時々感じていた。かといって、別に複雑な家庭に育つたわけでもなく。生まれて16年間何の不満もなく育ってきた。

そんな普通の生活をしているのに、時々すごく自分が不確かなものに思えたのだ。

でも、あの恐ろしいほど紅い夕焼けの中でおこったことだけは、とても鮮明に。

自分という生き物を、自分の中で強烈に意識できた瞬間だった。

「どうしたの？」

ぼんやりと窓の外を眺めていた私に少女が問いかける。

窓の外はあの時のような朱ではなく、透明な蒼にうつすらと雲がかっている。

周りは人がちらほらと数人しかおらず、眠つたり本を読んだりしている。

そして大きな書棚が整列しており、古い本がたくさん陳列していた。

図書室である。

「……いい天気だなと思つて。」

あれ以来何事もなかつたように彼女が振る舞うので、自分も気にする様子を見せないよう注意していた。

それよりも、今は彼の宣言していた事が気にかかっていた。それは目の前のこの少女に関係することなのだが。

少女はじつ、と私の目を覗き込んでいたのだけれど。

私の口が開かない事を悟つて、彼女からきり出した。

「涼・・・・・私告られたよ。」

「・・・・・そう。」

「どう思つ?」

聞かれて、思わず私は視線を逸らした。

「いいんじやない。あいつはいい奴だよ。」

ありきたりな返答をする。

短い沈黙が落ちた。

沈黙に耐えかねて、彼女の方に目をむける。

少女は寂しいような悲しいような、困った笑顔を浮かべていた。

「うん、いい人だよね。かつこいいし。人気者だし・・・・・。」

言いながら両手の細い指をもてあそぶように動かしている。

自分はその白い指の様子を眺めながら、「うん。」と無意識に返答していた。

「でも、断つちゃつた。」

上目使いで私を見る。

「・・・・・・・・・うなんだ。」

「うん。」

「どうして?」

「私、他に好きな人がいるから。」

彼女は自分の指に視線を落とした。

その表情がわずかに蔭る。

それは誰?と聞きたかったが、そこまで聞き出す度胸はなかつた。

そのかわりに、心臓がまた早く動きだすのがわかつた。

なんだか少し息苦しい。

「誰だと思う?」

「誰だと思う?」

私の心を読んだのか、彼女の方から口を開いた。
真っ直ぐと私を見据える。

私はその視線を逸らす事もできず受け止めるので精一杯だった。
ますます呼吸が苦しくなる。

どれくらいの沈黙が流れただらうか、それはほんの2・3秒だった
のだが、自分にはとても長く感じられた。

「…………」「ごめんね。」

少女はまた困ったようなあの笑顔を浮かべて、消え入りそうな声で
呟いた。

それは…………なんの「ごめん？」

ちゅうどんの時、少女の声をかき消すように授業開始のベルが鳴つ
た。

いつの間にか、先ほどまでいた生徒達の姿はなくなっている。
私はこの前の放課後を想いだしていた。

向かい合つた彼女から田を離せずに固まる。

少女はじっと私を見つめている。

「ほら、あなたたち。授業始まるわよ。」

はつ、とし その声に体の自由をとりもどした。
カウンターの奥から図書の先生が顔を出してくる。

「はい。」

「行こう。」

言つて、私達は慌てて図書室を後にした。

鼓動がやけにはやるのは授業に遅れるせいでも、走っているせいでも
もない事は既に気が付いていた。 - - - - -

まだ日も暮れていないと、頬にあたる風は少し肌寒くなつてきいていた。

ところでもう、空は蒼と朱のコントラストを鮮やかに描いていた。私はいつも帰る道を選ばず、細い裏通りをぼんやりと歩いていた。

彼女は委員会の仕事で遅くなるので先に帰る事にし、幼馴染は今日は欠席だった。

（もしかして、顔合わせびらくて休んだ……とか？）自分の知っている彼はそんなにやわ、ではないよつて思つていたので、その考えはすぐに打ち消す。

あの自身たつぱりの顔を思い出して、結構へこんでるんだろうな。と、思うと複雑な気分だ。

通りを歩いていると、その幼馴染が現れたので一瞬幻かと疑つてしまつた。

あどけない顔をした少年の肩を、がつしと掴んで何やら話し込んでいる。

その少年は困つたような顔をして首を振つて、向こうがこつちに気がついたようだ。ばつの悪い表情をして、頭をかいている。

「何恐喝してんの。」

私はつかつか、と一人の前に歩み寄り腕組をした。

「涼さん。」

少年はあからさまにほつ、とした表情をして困つたような笑顔をむけた。

その笑顔は「彼女」のそれと、よく似ている。

私は「久し振り。」とその少年に軽く笑顔をむける。

そして、傍らにいる幼馴染に顔をむけると

「する休みして、何いじめてんの。」

じりり、と睨む。

「いやあ、たまには想と一人で遊ぼうかと思つて。」

「ふうん。」

じつ、と問い合わせるように彼を見た。

彼は視線を逸らして、一つ溜息をついた。

「…………」といつに聞きたいことがあつてさ。」

と言つと、表情を曇らせる。

何も言わずにじつと見ていると、観念した様に重い口を開いた。

「俺、あいつに振られたんだ。あいつ好きな奴がいるって。」

予想以上にこたえているようだ。

「…………そう。」

「それで、好きな奴つて誰つて聞いても教えてくれないし。弟のこいつなら何か知つてるかと思つて。」

彼は自嘲気味に笑つた。

「知つてどうすんの？」

「どうもしないけど。ただ、どんな奴が好きなのかつて思つてさ。」

どうやらかなり落ち込んでいる様子だ。

自分が知つている彼は、あまり物事に執着せず彼女の事も（落ち込みはするが）あつさりと引き下がると思つていたのだが。

「僕は何も知りませんよ。」

少年は困つたようにおずおずと彼と見合わせている。

その手にはビニール袋を抱えていたのだが、それが一瞬動いた気がしたので私はそちらの方に目を向けた。その時 - -

「わっ！」

「ビニールから青虫が出てきたので思わず後ずさつた。

「あ、すみません。」

少年は慌てて虫を袋の中に入れた。

よく見ると軽く下の方が膨らんでもぞもぞ、と動いている。

「何・・・？ その袋。」

「はい。僕蝶の幼虫を集めてて、いつさんが持つて来てくれたんです。」

少年は満面の笑みをみせて答えた。

よほど嬉しかったのだろう、大切そうにその袋を抱えている。

かわいい顔をして、彼女の弟は変わった趣味を持っていたのだ。

私はその袋の中で、沢山の虫がうじゃうじゃ動いているのを想像してゾッ、とした。

「賄賂？」

私は横にばつの悪い顔をしている彼を見て言つてやつた。

今日学校休んだのは、それを集める為だったのだろうか。

学校で「かつこいい。」と女子からキャーキャー言われている彼が、女の子に振られたからといってその子の弟に探しをいれてみたり、その為に賄賂を贈つたりと「かつこ悪い。」事をしているのが少し気の毒に思えた。

きっと本人も自覚しているのだろう。

「女々しいつて思つてんだろう？」

「ポツリ、と彼が呟く。

「そんな事・・・。」

「でも、どうしようもないんだ、納得いかない。せめて好きな奴が誰なのかはつきりしたら諦めもつくかと思つて。」

視線を落として紡ぐ言葉が私の心臓をかすかに刺す。

図書室で彼女が「誰だと思う?」と言った言葉が脳裏に浮かんだ。

彼女は真っ直ぐな視線をむけていたのだけど。

私はあの時、自分の気持ちに翻弄されてその意味を考える余裕はなかったのだ。

彼に言われて改めて思い返すと、彼女は辛い恋をしているようだった。

そして唐突にあの放課後のキスを思い出す。

私はもしかして、と思ひ気持ちとまさか、と思ひ気持ちで混乱した。呆然と立ち尽くす私に気がついて、「どうしたの?」と少年が心配したように尋ねる。

私ははつ、と我に返り「なんでもないよ。」と無理やり笑顔をつくつた。

・・・・・さうだ、まさか。そんな事あるわけない。彼女が私に恋心を抱いているなんて・・・だって、私は彼女の親友。彼女は私の大切な同性の友達なんだから・・・

冷たい風が桃子の頬をなでる。

雨の日が続いた後、急に冷え込んできた。

彼女は首をすぼめて足早に歩いていた。

今日も担任の園田先生に、例の「居残り。」を言い渡されたのだ。

「説教が長いんだから。」

桃子は愚痴りながら、薄暗くなつた通りの路地を曲がつた。
マンションの2軒隣に建つてゐる喫茶店の前を通り過ぎよつとした
が - - - - - 。

見知つた顔が田の端をかすめ足を止める。

その一人を確認し、思わず看板の陰に隠れる。

桃子は驚いてその一人を盗み見た。

およそツーショット等思いつかない一人だつたのである。

「お父さん・・・・・と、なんで武田せんせい?」

一瞬、自分の学校態度について先生が訪問しに來るのかと思つた
のだが。

それならば担任の園田が來るはずだらう、それに・・・・・。

武田先生と父はなにやら親密に話をしている。

そうだ・・・・・昔からの知り合いのよつな。

桃子は寒いのも忘れて二人の様子を窺つていた。

(声が聞ければいいのに。)

中に入つたら氣づかれてしまうだらう。

どうしようか、と迷つてゐると父が何か怒つたよつに叫びながら席

を立ち上がった。

先生は悲しそうな、けれど真摯な田で父を見ていた。

父は興奮をおさめる為に一呼吸おくと、あの何も見ていないような目になり先生に何か呟いた。

先生は何か言いたそうにしたがそのまま口を紡ぐ。

父がこちらに顔を向けたので、慌てて顔を引っ込める。

急いで隣のビルとの隙間に身を潜める。

（隠れることはないんだった。）

見てはいけないものを見たような気がして、思わず隠れてしまった。

カラーン とドアが開く音がした。

そのまま父は反対の方に歩いて行つたようだつた。

ホツ。

桃子が胸を撫で下ろしていると、「相川さん。」

突然背後から声を掛けられ、心臓が跳ね上がった。じつと身を潜めてる桃子を見て、彼は目を丸くしている。

「奇遇ですね、先生。」

桃子はなるべく自然な様子で（行動がすでに不自然なのが。）武田先生に声をかけた。

「どうしたんですか？こんな所で。」

そんな飄々とした態度の桃子を見て先生は困ったような笑顔を見せた。

「相川さん」そそんな所で何してるんですか？」

「家に帰る途中です。」

「もう暗くなつてきてるのに、女の子がこんな所にいたら危ないですよ。」

先生は本当に心配そうな顔をしたので、ちょっと畠が締め付けられたようになつた。

（どうせ、のぞき見してたのばれてるんだろうな。）

桃子はひとつ息を吐いた。

「先生と父が話しているの見かけて気になつたので見てたんです。」

「そうですか。」

先生は少し目を伏せて、どう話そうかと迷つてゐるようだつた。

ビルの隙間から寒い風が通り過ぎる。

先生の少し癖のついた髪がフワリと踊る。

「ちょっと入りましょうか。」

「はい。」

彼は先程出たばかりのドアのノブをゆっくりと回したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033c/>

放課後

2011年3月30日06時54分発行